古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 248 号（2023 年 7 月）

韓倭関係語探源[1]

伊藤英人（専修大学）

1. 導論

本稿は、韓語と倭語（日琉語）間の音形や語意が類似すると考えられる若干の語について考察することを目的とする。両言語間の語の類似については、18 世紀の『東雅』以来、そして 19 世紀から 1970 年代までは主として系統論の観点から、近年は借用語として精密な音韻対応に関する研究[2]に至るまで、先行研究は枚挙に遑がない[3]。

福井玲（2020）は画期的な研究である。この論文はいわゆる日韓同源語を、綿密な音韻対応研究からそれらが借用語であることを淡々と記述しているが、長田俊樹（2020:4）は精確にその重要性を次のように指摘している。

> 福井論文は日韓比較研究のうち、河野六郎が同源語とみなした語彙を丁寧に吟味し、それらが借用語であることを指摘している。日本語と朝鮮・韓国語の同系説の根幹をなす対応語が借用語であるとみなすことによる今後の研究に与える影響は計り知れない。

近年、マックスプランク研究所のロベーツ氏が主導するトランスユーラシア語仮説は、Macro-altaic 仮説の看板を付け替えただけの日韓アルタイ同源論である。この仮説が遺伝学、考古学等の他分野の威を藉りて、比較言語学的には極めて薄弱な根拠をもとに声高に主張され、既成事実化されつつある状況を鑑みるとき、この論文の意義は一層の重要性を増す[4]。

本稿は、福井玲（2020）を受けて、借用関係の内部に立ち入ることを試みるものである。

---

[1] 本稿は第 275 回朝鮮語研究会（2023 年 6 月 24 日　東京大学文学部 3 番大教室）における同名の発表論文を改稿したものである。

[2] 福井玲（2020）がその代表的な研究である。

[3] 本稿で扱う語の殆ど全ては過去に数多の研究で言及されてきた。このため、先行研究への言及は必要最小限に留める。

[4] もっとも、Robbeets, Savelyev （2020）は、総 1000 頁近い大著であり、日琉、韓、ツングース、モンゴル、チュルクの諸語族の専門家による近年の研究成果を取り込んだ詳細な記述がなされており、該書が、Poppe（1960）, Starostin（2010）, Tranter（2011）と並んで、韓語史研究者が座右に置くべき優良の工具書であることは疑いを容れない。しかし、論の核と謂うべき Robbeets（ibid.:645-659）で挙げられた基礎語彙 100 語の比較において、日韓同源語として挙げられた 30 余語には韓語*pal（tooth）のように誤解に基くものや、倭・韓の*nan-ka（be long）と*nʌlkʌ（be（come） old）のように語義の離れたものが含まれ、全体的な再検討を要すると考えられる。Robbeets（2020:23）によれば、「歯」の*pal は ippar の後半部であるとするが、これは「簾」であり、縦長のものが横に並んだものを指し、「歯」ではない。

本稿における「韓語」の「韓」は Koreanic の謂である。倭は Japonic を指すが、南西諸島を含む日本列島に分布する日琉語族諸語のみならず、8 世紀までは確実に存在した朝鮮半島を中心とする「大陸倭語」を含む[5]。

「関係語」とは、同源か借用かを問わず、語意と音形が類似した異言語間の語を指す。曽暁渝（2004:1）でいう「所谓关系词，指不同语言之间在语音和语义上有对应关系的词（或语素）いわゆる関係語とは異なる言語間で語音と語義において対応関係のある語（または形態素）」の「关系词」を機械的に日本語訳した用語である。曽暁渝（2004）は、カム・スイ諸語を含むクラ・ダイ語族を中国の学会の伝統に従って「漢蔵語族」すなわちシナ・チベット語族に属するという立場に立つため「关系词」は同一語族内の同源／借用をまとめて扱うための用語である。しかし、筆者は、倭語は日琉語族/Japonic language family、韓語は韓語族/ Koreanic language family という別の語族に属すると考える立場に立つ[6]。

韓語から倭語への、或は倭語から韓語への借用語であるのか、あるいは放浪語/Wanderwort であるのか、あるいは何らかの先行言語から引き継いだ同源語であるのかを問わず、両言語間の語形と語意の類似した語を再度検討する試みを、単語家族の根の張り方、アクセントなども考慮に入れて行うことになる。

2. 大陸倭語

いわゆる日琉諸語以外に、唯一その同系言語と考えられる語が認められるのは、永らく「高句麗地名」として知られてきた朝鮮半島の地名要素に出現する要素である。これらは研究者によって「高句麗語」「百済語」「濊語」などとされてきた[7]。

一つだけ確実なことは、757 年の地名改正に際して新羅の官吏が、「その音訓を解し得る」言語による地名を記載したという事実である。筆者はこの言語を、新羅の臣民を構成する一グループである「靺鞨国民」すなわち濊人の言語と見たが、8 世紀中葉まで長きに亘って、韓語と隣接し接触してきた大陸倭語が存在したという事実は否定できない[8]。　以下では、日琉諸語と同系言語であり、朝鮮半島から吉林省、遼寧省の地名に現れる言語の名称を中立的な「大陸倭語」と称し、列島倭語とあわせてこれを「倭語」と呼ぶことにする[9]。

---

[5] 大陸倭語については伊藤英人（2019a, 2021a,b）参照。

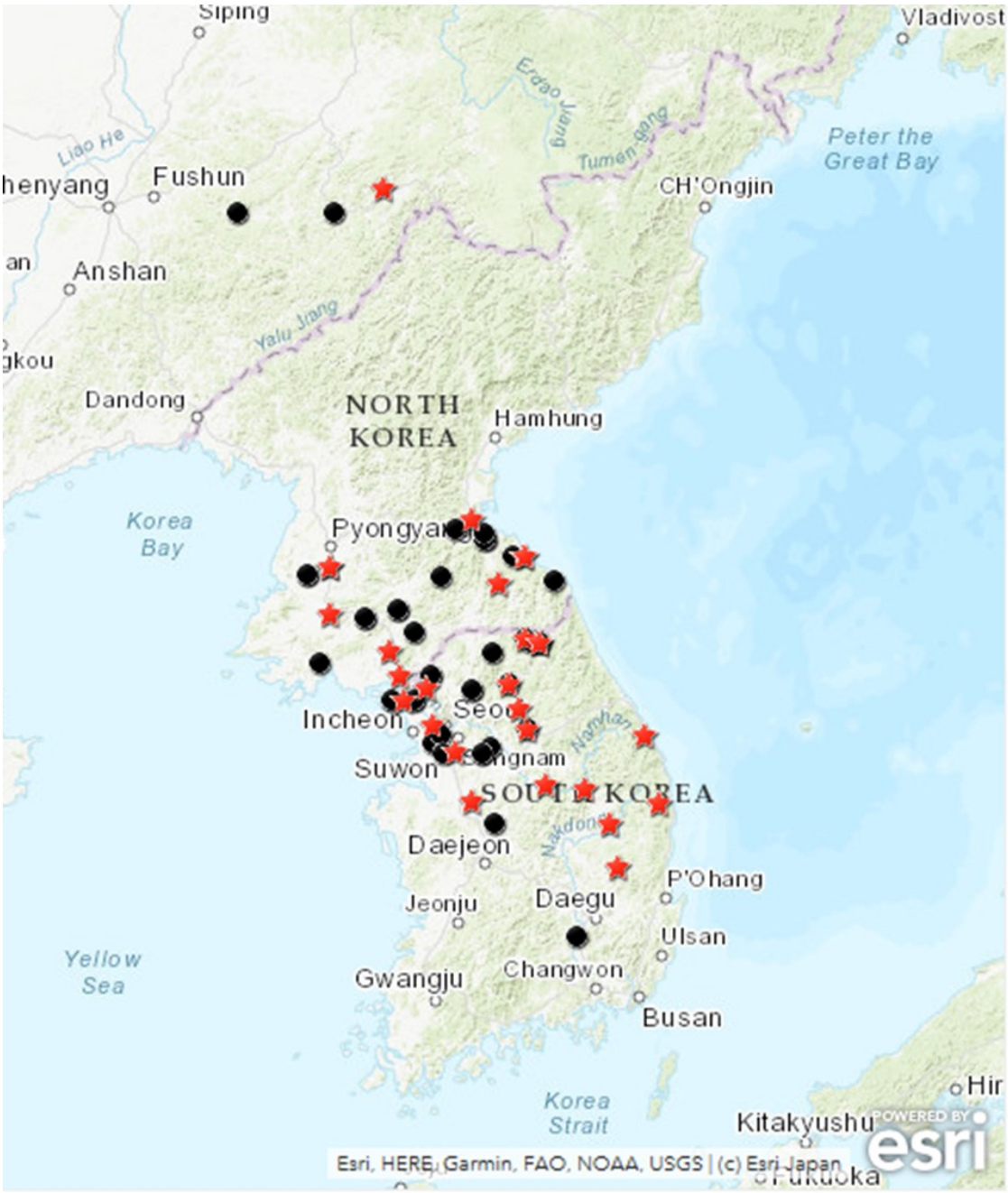
[6] もちろん、倭語と韓語がさらに遡って同系でないことの証明は不可能である。

[7] 高句麗語説に Beckwith（2004）、百済語説に都守熙（2004a,b）、濊語説に伊藤英人（2021a）などがある。

[8] 濊人であれば BC15 世紀ごろから、百済（王族）語であるとしたら紀元前から、高句麗語であるとすれば AD4 世紀頃から韓語と朝鮮半島において接触してきたことになる。なお、以下「百済語」を百済王族語、「百済韓語」を百済民衆韓語の意で用いる。

[9] 以下本文で「倭語」の語形として特に断らない限り上代日本語形を挙げ、アクセントは平安以降のアクセントを示す。同様に「韓語」は 15 世紀の語形とアクセントを示す。「倭語族」は日琉語族に大陸倭語を加えた拡大日琉語族を指す。なお、「倭」字は貶義字ではなく、701 年の「日本」建国後にも「大倭」などが官撰資料に見えるため本稿では通時的に「倭語」を用いる。

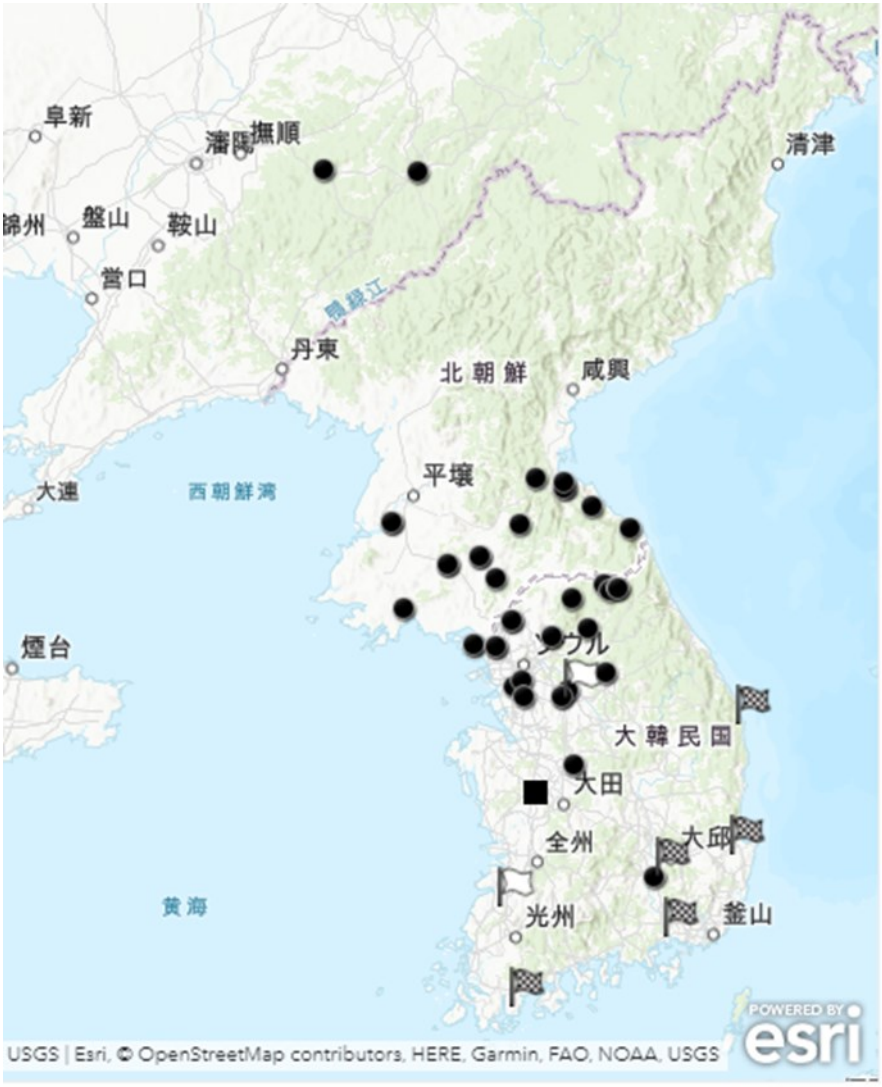
伊藤英人（2019a）より「高句麗地名」中の大陸倭語（●）と古代韓語（☆）の分布を示せば地図 1 の通りである[10]。　地図 1 は 757 年の地名改正資料に基づくが、旧地名は三国時代以来のものである。すなわち、倭語と韓語の朝鮮半島におけるモザイク状の分布は三国時代以前に遡ることになる。



地図 1

[10] 言語地図作成は以下の地図 2 の大陸倭語の分布図と共に黒澤朋子氏による。

また、伊藤英人（2021a）から、大陸倭語のみの分布を再度引用すれば以下の如くである。



地図 2

地図 2 は朝鮮半島における大陸倭語の分布を、3 世紀、6 世紀資料を加えて地図化したものである。倭語と韓語の間の借用は、三国時代以前に行われたと考えられる。したがってその韓語の音韻体系は伊藤智ゆき（2007）が再建する 8 世紀統一新羅韓語のそれより古い体系であったことになる。

3. 古代韓語と大陸倭語の音韻体系

伊藤英人（2021a:59-60）で再建した 8 世紀大陸倭語の音韻体系は以下の如くである。

母音

/i/ /y/ /u/

/e/

/ɛ/ /ə/

/a/

半母音

/j/

子音

/p/ /t/ /k/

/m/ /n/

/s/

/ʧ/

古代韓語については、子音体系は各論において論じることとし、その母音体系の再建を以下のように試みる。以下の古代韓語の母音体系の再建は、三国時代の慶州盆地で及び伽耶地域で使用された韓語についての暫定的な再建であり、同時期の百済韓語、朝鮮漢字音受け入れ時期である 8 世紀中盤以降の統一新羅時代の古代韓語のそれらを含まないものである[11]。

/i/ /y/ /ɨ/ /u/

/e/ /ə/

/ɛ/

/a/

15 世紀韓語への変化を次のように仮定する[12]。

---

[11] 三国時代の韓語に既に東西の方言差が存在したと考えられる。「集落・邑」を意味する 3 世紀韓語*peri（『魏書』東夷伝「卑離」）が、百済韓語では*pɯri（百済地名「夫里」）、新羅韓語では*per（「蔚珍鳳坪新羅碑」524 年「伐」）となっているように、百済韓語において円唇順行同化、新羅韓語において語末母音脱落/apocope による音韻変化が生じていたことがわかる。なお、倭語 köfori （評・郡）は、百済韓語の*kəpɯri（大邑）の借用語であり、現代韓語 koɨr（郡）につながる新羅韓語 *kəper（大邑「蔚珍鳳坪新羅碑「居伐」）の借用ではない。なお、『隋書』百済伝の「其都曰居抜城」の「居抜」は新羅韓語形と一致するが、尚後攻に俟つ。

[12] ハングル転写は巻末参照。

/i/ ＞ i
/y/ ＞ u
/ɨ/ ＞ i
/u/ ＞ o
/e/ ＞ ɨ
/ə/ ＞ ʌ
/ɛ/ ＞ ə
/a/ ＞ a

4. 韓倭関係語の例

4.1.「木、株」

倭語の「木」は kï であり、複合語の前部要素では kö と交替する。筆者は伊藤英人（2020,2021a,b）において、濊倭祖語（大陸倭語と列島倭語＝日琉祖語の共通祖語）から 8 世紀大陸倭語までの音韻変化を次のように仮定した。

濊倭祖語 *kər ＞ 8 世紀濊語 *ker L

伊藤英人（2021a,b）に詳述したが、8 世紀大陸倭語の「木」を*ker と再建する根拠は「高句麗地名」の二つの地名である。

「赤木県[一云沙非斤乙]」（江原道淮陽郡蘭谷面）
「栗木郡[一云冬斯肹]」（京畿道始興郡果川面）

「斤乙」「肹」が*ker を表記したものと考えられる。声母は「斤」が見母/k/, 「肹」が暁母/x/であるが、大陸倭語には牙喉音の別がなかったと考えられる。また「乙」「肹」の韻母は質韻開口三等乙入声であり、韓語の伝来字音ではともに/-ɨr/になる。漢語中古音では主母音は前よりの/e/であり、上で示した古代韓語の字音では「斤乙」も「肹」も*ker を表記したと考えられる。

伊藤英人（2021b:40）では列島倭語を含む音韻変化を次のように仮定した。

*kər 倭祖語[13] ＞ *ker L 大陸倭語
＞ *kəj ＞ kï～kö 倭語 ＞ ki～ko L[14]

[13] 伊藤英人（2019a,2021ab）で「濊倭祖語」としたものを以下本稿では「倭祖語」とする。
[14] 以下、声調は、特記されない場合、平安アクセントを指す。略号は巻末参照。

周知の如く、韓語の「木」は namoLL~namk-L であり、大陸倭語とは一致しない。しかし、この「木」を意味する大陸倭語は、韓語に借用されつつ韓語型の語形を取り、その意味領域を狭めたのではないかと考えられる。

韓語 kɨrihLL は、「木の切り株」の謂である。

筆者は、古代韓語に、-Vŋ と並んで、*-Vh という接尾辞が存在した可能性があると考える。

*pat-（平面）+ah＝*patah LH（海）
*pat-（平面）＋aŋ=*pataŋ LH （底・場）
*pat-（平面）+əh＝*patəh ＞ path L（畠）

同様に

*ker 大陸倭語「木」→韓語に借用 ＞ker+eh（切り株）＞15 世紀韓語 kɨrih LL

といった借用と音韻変化を想定しえる。

韓語の kɨrih LL は、大陸倭語*ker（木）を借用したものに韓語の接尾辞が付き意味変化を生じた語である可能性がある。

服部四郎（2018:322）は、「先日本語」から「日本祖語」への音韻変化を**kur＞*kui と措定した。また。同章の注 160 において「**-r→*-i という音韻変化は突飛なように見えるかもしれない。しかし/**-r/が母音間では現代朝鮮語のように弾き音の r であり、末鼻音としては朝鮮語の-l にも似た舌先・歯茎音のやや明るい音色の l であったとすれば、そういう音韻変化は十分可能である」（ibid:397）と述べている。また注 161 で「≪木≫を意味する先日本語形を**kər とすると、中期朝鮮語の kɯrɯh ≪株≫と似てくる」（ibid.:397）としている。kɯrɯh は本稿の表記では kɨrih となる。筆者は大陸倭語「木」を意味する 8 世紀大陸倭語*ker から倭祖語形*kər を再建したが、この語形が奇しくも服部四郎（2018）の再建する「先日本語形」と一致することは興味深い[15]。

4.2. 「畑」

従来の日韓同系論で例外なく言及されてきた語であるが、福井玲（2020:24）は、他の「道具や農耕、仏教に関する語彙」とともに「借用語」であるとしており、本稿もこの語を韓語から倭語への借用語であると考える。「畑」を表す本来の倭語は語根*√par-（開く）を持つ*paru 若しくは*pari であったと考える。15 世紀韓語は path L であり、上述のようにこの語

[15] 服部四郎（2018）は大陸倭語、接尾辞*-Vh について言及していない。

は「平面」を意味する*√pat を持つ語であると考えられる。

倭語は　fata LH ＜ *pata LH である。CVC＞CVCV の変化は借用を通しての寄生母音の添加と見ると説明がつく[16]。 LH として受け入れられた理由はこれを審らかにしない。

4.3.「徴」

倭語で物を徴することを fataru LLF と言った。古来、韓語の pat- L（受）と「比較」されてきた。上述の*√pat は、名詞語根としては「平面」、動詞語根としては「平面上のもの（掌など）を前に出して、支えたり、献じたり、追突する、或は受け取る」という意味になると考え得る。倭語*pataru も韓語 pat- L からの借用語である可能性を排除できない[17]。

4.4. 「島」

福井玲（2020:18-22）は、倭語の sima LL を、韓語*sjema LH ＞ sjem R（筆者の表記では siəm R）の借用語と看做し、借用語として受け入れられる過程で LH＞LL という変化が生じたとしている。

しかし、筆者は、これを倭語から韓語への借用語であると考える。

韓語の「島」は 6 世紀の金石文資料で「斯麻」として現れる。503 年の「須田八幡人物画像鏡銘」及び 523 年の「武寧王陵墓誌銘」に武寧王を指す固有名詞として現れる。これが何故「島」という一般名詞を指すと言えるかの根拠は以下の通りである。

『日本書紀』雄略五（461）年条に「百済新撰」（佚書）を引いて次の記事がある。

百濟新撰云「末多王無道、暴虐百姓、国人共除。武寧王立、諱斯麻王、是琨支王子之子、則末多王異母兄也。琨支、向倭時至筑紫嶋、生斯麻王。自嶋還送、不至於京、<u>産於嶋、故因名焉</u>。今各羅海中有主嶋、王所産嶋、故百濟人號爲主嶋。」今案、嶋王是蓋鹵王之子也、末多王是琨支王之子也。此曰異母兄、未詳也。（下線部訳：島で産み落としたのでそのように名付けたのである。）

伊藤英人（2021a:54）は、これについて次のように論じた。

「各羅海中」の嶋は佐賀県唐津市の加唐島であるとされる。伝世資料と二つの出土資料から確認される「嶋＝斯麻」は濊語の次の語が韓語に借用されたものであると考

---

[16] 瀬間正之（2020:18-22）は、「高良かわら」「考羅かわら」「早良さわら」「法吉ははき」「相模さがみ」「男信なましな」など子音韻尾のみならず半母音韻尾を含む字音に-a が添加される例を挙げている。『播磨国風土記』の「鴨波 あはは」の「鴨」も’ap に-a が添加された例であり、また次項の「各羅かから」も同断である。。

[17] 15 世紀韓語では pat-は接辞化して-vat-～-oat-となって、様々な動詞語根について強意を示す。

えられる。

斯：止摂支韻開口三等甲入声心母 息移切

麻：假摂麻韻二等開合平声明母 莫霞切

斯： ṣię̯, sĭe, sje[18]

麻： m（w）a, ma, mae

6 世紀濊語及び上代日本語への音韻変化として次の変化を措定する。

*sima 濊倭祖語 ＞*sjɛma 6 世紀濊語

＞ sima 上代日本語

筆者が「島」を倭語から韓語への借用語であると考えるのは、韓語には同語根を共有する単語家族が存在しないのに対して、倭語には「島」と語根を共有する一連の単語家族が存在すると考えられるためである。

倭語 sima LL は、動詞 simu LF（占有する）の情態言であると考えられる。

〈上代：366〉は「しま」について、「島」の他に「海の島ではなく、川が巡り流れて、島のようになっている地域」、また別の見出し語として「池や築山のある庭園。林泉」を挙げている[19]。

動詞 simu からの派生語に sime LL（標）があり、8 世紀倭語形は simë である。これは情態言 sima に絶対接尾辞*-i が付き、*sima-i ＞ simë の過程を経たものと考えられる。〈上代：369〉で「しめ」について「神の宿りであるとか、自分の所有であるとかを示すため、あるいは道しるべのための標識」と語釈する[20]。 この simë を含む複合語に simënafa（標縄）「占有のしるしの線」〈上代：369〉、simeno（標野）「しめをはって他人の入ることを禁じた野」〈上代：369〉がある[21]。

こうして見ると、倭語 sima は、「標」「標縄」「標野」などと共に動詞 simu LF からの派生語であると考えられる。低起という点もそれを支持する。次のような音韻変化を想定しえる。

倭祖語 *sima ＞ 6 世紀大陸倭語 *sjɛma

＞ 倭語 sima

福井玲（2020）は古代韓語の「島」を sjema とし、日本語の「島」を韓語からの借用と看做しつつ、韓語からの借用において母音 i は i に対応するものの、「[島] の例を見ると、あるいは韓語 je が対応するようにも見える」（福井玲 2020：26）と述べている。

---

[18] 中古音再建音価は、河野六郎（1964-1967/1979Ⅱ1）、郭錫良（2010）、Baxter-Sagar（2014）／白一平、沙加尓（2020）の順である。

[19] 書名の略称は各参考文献に〈 〉で示した。

[20] 〈上代〉の平仮名の下線は乙類であることを示す左傍の線に替えたものである。右傍に線がある場合は無表記とした。

[21] 「しめの」の「め」は甲類である。

しかし、筆者は、古代韓語の「島」を*sjɛma と再建する。上述の母音推移「ɛ＞ə」からも 15 世紀韓語までの音韻変化をより明確に説明し得る。

古代韓語　*sjɛma　＞ 15 世紀韓語 siəm R

すなわち、語末母音脱落、代償延長、母音推移によって、古代韓語から 15 世紀韓語への音韻変化が説明できることになる。

倭祖語 *sima から 6 世紀大陸倭語 *sjɛma への音韻変化は後続広母音 a による breaking of *i である。

この大陸倭語 *sjɛma が、古代韓語に借用された。借用語であるので、韓語内部には、倭語の「標」「標縄」「標野」「占む」のような単語家族が存在しない。

なお、古代韓語のアクセントも倭語同様に LL であり、それが 2 音節名詞のデフォルトである LH にその後に変化したと考える[22]。

4.5.「熊」

「熊」を始めとする一連の語を考えるには 15 世紀韓語 o と倭語 u の問題をどう考えるかについての立場を暫定的にでも決めてから論じざるを得ない。このことは、韓語史における母音推移をどう考えるのかという問題と不可分である。

河野六郎（1964-1967/1979Ⅱ:511）は朝鮮漢字音の分析を通して、15 世紀韓語の o は古代韓語において u であったとした。同じく新たな資料を加えて朝鮮漢字音の分析を行った伊藤智ゆき（2007:267）は、15 世紀韓語の o は古代韓語においても o であったとする。福井玲（2013）はこの問題について結論を出していない[23]。　福井玲（2020:19）は「熊」の古代韓語形を*koma と再建し、この語に関しては*u ＞ o の音韻変化を想定せず、古代韓語でも母音が*o であったとの立場を示す。しかし、同論文で挙げられた 15 世紀韓語 o と倭語 u の対応関係についての言及はない[24]。

---

[22] 伊藤英人（2021a:54）の注 121 で詳論した。

[23] 伊藤英人（2019b：46）で,「読者としては是非知りたいところであるにも関わらず本書で触れられなかった問題として, 古代語から中世語への母音推移問題への著者の見解がある。河野六郎 （1964-1967）「朝鮮漢字音の研究」(『朝鮮学報』 31−44,『河野六郎著作集』2, 平凡社 1979）は古代語から中世語にかけての次のような母音推移を仮定している。すなわち, i i > i, ï > i, e > ɯ, ä > ə, ə > ɐ,u > o, ü > u の変化である。第 8 章で「伐 *per（町)」という再建形がさりげなく示されているところから推察すれば,著者は河野六郎説の母音推移を受け入れる立場であるように見えるが, *ü > u, *o > u の問題も含め,古代語から中世語にかけて生じたとされる母音推移についての著者の見解を知りたく思うのは書評子のみではあるまい」と評した。

[24] 福井玲氏（p.c. 福井玲教授最終講義 2023 年 2 月 19 日 東京大学文学部 3 番大教室における質疑応答）より、これらについてはなお後攻に俟つとのお答えを頂いた。早急に甲乙をつけず、いわば小骨の刺さった状態に耐えることがより深い真実に到達する可能性を生

この問題に関する本稿での筆者の考えは以下の如くである。

借用語（本稿でいう関係語を含む）の音韻対応の問題は、相互の借用の時期が同じでない可能性を含み、同一語族内の音韻変化のように一斉の変化では説明しきれないものである。朝鮮漢字音の分析を通して再建される古代韓語の音韻体系は、朝鮮漢字音の母胎が慧林『一切経音義』の音系に基づくことから、8 世紀以降、すなわち統一新羅時期のそれであると考えざるを得ない[25]。

しかし、本稿で言及する関係語が統一新羅韓語と奈良時代倭語の言語接触によるものであるとは考えられず、多くは三国時代韓語や大陸倭語（濊語）及び倭国時代倭語の間の言語接触を通してのものであるはずである。

伊藤智ゆき（2007）の言うように、朝鮮漢字音受け入れ時期の統一新羅韓語の母音体系が 15 世紀韓語に近いものであったとしても、三国時代の新羅韓語では河野説のような体系を想定し得るのではなかろうか。倭語と三国時代韓語の関係語の多くが 15 世紀韓語の o と倭語 u の対応を示すことが最大の傍証である[26]。以下では三国時代新羅韓語の母音体系が上述のようなものであったとの仮定のもと考察を進めることとする。また、三国時代の百済韓語の音韻体系は、上述の如く、新羅韓語のそれとは明らかに異なっていたと考えられるが、百済韓語の資料の圧倒的欠如のため、本稿では部分的言及に留める[27]。

河野六郎（1954/1979I:558-559）は雄略廿三年紀の「久麻那利」、継体廿三年紀の「熊川」の古訓「クマナレ」を引きつつ、「熊」を「クマといったのではないかといふ疑が起る」が、「少なくとも[熊]に関してはさうでなかった」（ibid.:559）としつつ、『梁書』百済伝「号所治城曰固麻城」を引いて、百済では koma と称していたとする。「久麻那利」は「熊川」すなわち慶南昌原郡熊川面、「固麻城」は「熊津」すなわち忠南公州である[28]。

「固」「麻」の音韻地位と諸家の中古音再建形は以下の如くである。

固：遇摂暮韻一等開平声見母　古母切　ko,　ku,　－
麻：假摂麻韻二等開合平声明母 莫霞切　m（w）a, ma, mae

倭語「熊」は kuma LL である。「固麻」の古韓音再建調値は LL である。このことから、古代韓語の「熊」の再建形 *kuma～*koma のアクセントは倭語同様、LL であった可能性を排除できない。

ここで注目すべきは、「久麻那利」には、「コムナリ」という古訓が存在することである

むことを思い、あらためて福井氏の治学の姿勢に敬意を表するものである。

[25] 日本中国語学会編（2022:33）によれば、同書の編纂時期は「784－807 年（一説に 788－810 年）」とされる。

[26] 前期中世韓語におけるモンゴル語借用語の母音対応の問題はここでは考察外に措く。

[27] 母音/ɯ/の存在、新羅韓語における語末母音脱落の未経験による開音節語の優勢などが認められる。

[28] 福井玲（2020:19）が「熊」を*koma と再建するのは、河野六郎（1959/1979 I :559）が、「固麻」を*koma と見たことに拠る。

[29]。　また、辻星児（1997:5）は、「三根郷御代々御判物写」（1451 年）に「熊川」の仮名表記として「こもかい」があることを指摘している。

一方、大陸倭語とも韓語とも判断しかねる「高句麗地名」に「熊＝功木」があり、*kumu LL が再建できる。「コムナリ」「こもかい」の「コム」「こも」は、この*kumu の反照形であると考えられる。すなわち、「熊」について次のような音韻変化を想定し得る。

kuma LL ～ kumu LL ＞ koma LH ～ komo LX

倭語、韓語のいずれもそれぞれの内部に「熊」の単語家族を持たないようである。[30]

熊のように列島を含む東ユーラシアにおいて旧石器時代以来ヒトと共棲してきた象徴性の高い動物が、韓→倭、倭→韓の間でやり取りされるような借用語であるとも考え難い[31]。

白一平・沙加尓（2020:502）は「熊」の上古音として*C.[G]w（r）əm を再建している[32]。大陸倭語形を含め、*Kwəm のような東アジア共通語根を持つ放浪語/Wanderwort ではないかと考えられる[33]。

4.6.「瓜」

福井玲（2020:16）は、河野六郎（1954/1979I:558-559）が、15 世紀韓語と倭語の o : u の対応の一つである「uri : oi ’瓜’」について、「韓語の oi は中世語では上声であった、もともとは 2 音節語であったと考えられ、その際に語中子音 r が脱落するのは他にも並行的な例が見られるところであり、これは音の面でも、意味の面でも問題ないと言える」と述べている。

三国時代の古代韓語から 15 世紀韓語までの音韻変化は次のように措定し得る。

古代韓語 *uri LH ＞ 8 世紀韓語　*ori LH ＞　15 世紀韓語 oi R

倭語の uri は LH であり、古代韓語と一致する。

韓語内部には、*uri の単語家族は存在しないように見える。一方、倭語には次のような単語家族と思しき語が存在する。

---

[29] 雄略紀廿一年条。辻星児（1997:3）参照。

[30] 「隈」kuma は HH で別語である。*kuma～*kumu のような情態言～抽象言の語形成を見ると、*√kum-のような動詞語幹を想定したくなるが、「奇御戸」kumido を「隠ミ処」と解釈する説は〈上代：270〉で否定されている。「抽象言」は阪倉篤義（1966,2011）の「インフィニティヴ」に相当する。伊藤英人（2021a:61）参照。

[31] 13 世紀末の資料ではあるが「檀君神話」に見られるように熊は朝鮮半島においても象徴性の付与された動物であった。

[32] C.は何らかの語頭子音、[ ]は不確定性を、(r) は接中辞を示す。

[33] *Kwəm は、何らかの軟口蓋子音＋合口性＋中舌中央母音＋mを抽象的に表記したものである。

urufi LHL（うるひ、オオバギボウシ）、urufu LLF（潤ふ）、 urufosu LLHL（潤す）、urufofi LLLL （潤ひ）、urufofu LLXX（潤ふ）、urumu LLF （潤む）。

「水で潤す」或は、「水分を大量に含む植物の名称」に関連するこれらの語は「瓜」と語義の点で共通性を持ち、アクセントにおいても低起式である点などから、*uri は本来的な倭語であり、韓語は三国期以前にこの倭語を借用したものと考えられる[34]。

4.7. 「河豚」

福井玲（2020:15）は、河野六郎（1954/1979I:558-559）の「fuku：pok ‘河豚’」について「これは音の面でも意味の面でも問題ないが、似過ぎているので却ってどちらかの側での借用語ではないかと疑われる」と述べている。

15 世紀韓語は pok H であり、倭語は、fuku LL であり、アクセントは一致しない。韓語には単語家族が認められないが、倭語には次のような単語家族が認められ、それらの内には高起語も存在する。

fukube LLH（河豚）、fuguri HHL （陰嚢）、fukuru HHL （脹る）、fukuro LLL （袋）
fukufukusi LLXXL （肺）

いずれも「球体に膨張する」意味を共有している。本来の語根が高起であるか低起であるか判然としないが、韓語 pok H は、三国期以前に倭語から韓語に借用された語であると考えられる。

4.8. 「串」

福井玲（2020）は、15 世紀韓語 koc と倭語 kusi の対応について、「これは可能な引き当てであるが、韓：koc（串）には[岬]を意味する用法がある点で異なる」（ibid.:14）、「韓語の側で[岬]の意味で用いられる用法が日本語には皆無である点は若干気になる」（ibid.:15）としている。

しかし、これは正しくない。伊藤英人（2021a:36）は日本語地名における谷川健一（2010:）による「岬＝串」の例を引用し、次のように述べている。

> 黄海道長山串は caŋsankoc と読まれる。谷川健一（2010:91）は九州西岸及び四国に「くし～ 串」を含む「海岸の突出部」地名を挙げている。「くし」で終わる地名のみを

[34] Pellard（2013:85）は「瓜」の祖語形として、*ori を再建している。半狭母音の狭母音化（MVR、後述）の問題として、ここに挙げた「単語家族」の検討が必要であるが、ペラール（2021）、五十嵐陽介（2021）、平子達也（2021）などに見る限り、これらの語の狭母音化の例証は困難である。

挙げれば以下の如くである。鹿児島県「小串：志布志湾から大隅半島にさいかかるあたり」「瀬々串：喜 入町」「久志：坊津」「幣串：長島」、熊本県「串：大矢野島」「高串：上島龍岳町」「小串： 下島五和町」、長崎県「櫛：対馬上県郡」、愛媛県「串：佐多岬半島」「家の串：北宇和島郡」。 朝鮮半島地名「串」との関連を考え得る。

語形について言えば、次のような音韻変化を措定し得る。

古代韓語　*kuts　＞　15 世紀韓語　koc L

倭語の kusi は HL であり、アクセントは対応しない。

単語家族についてみると、倭語にはそれが見当たらず、韓語には動詞 koc- L（挿す）が存在する。この語は、sin H（鞋）～ sin- R（履く）、stii H （帯）～ stii- L （帯びる）、pis H（櫛）～ pis- L（梳かす）などと共に、名詞動詞共通語幹の語として、韓語の中に根を張っていると思われる。

古代韓語名詞 *kuts が、語形語義共に倭語に借用され、閉音節を開音節化させる支えの-i が添加されたものと見られる[35]。アクセントの不一致は尚後攻に俟つ。

4.9. 「苧」

古代の重要な布の原料で、日本列島と朝鮮半島で共に多く使用された「からむし」の称謂である。福井玲（2020:22）は、「kara-が接頭している点でも借用語らしく思われるが、上代語にもすでにこの形が見えることから、かなり古い時代に借用されたものと考えられる」と述べている。次のような音韻変化を措定し得る。

古代韓語　*musi LL　＞　15 世紀韓語　mosi LL

倭語は古代韓語*musi LL を三国期までに借用し、musi LL として倭語の語彙に採り入れたと考えられる[36]。　福井玲（2020:20）の述べる通り、複合語前部要素に kara-が付くものは、渡来した文物である[37]。

4.10. 「沼」

福井玲（2020:15）は、河野説の「nu, numa’沼’：non’水田’」の比較に対して、「これも意味

---

[35] 飛鳥池遺跡出土音義木簡の「恋 累?尓 レニ」、万葉仮名の「丸 ワニ」「粉 フニ」「難 ナニ」「弾 ダニ」「雑 サヒ」「訓、君 クニ」「干、漢 カニ」など参照。

[36] musi LL（帔）、karamusi LLLL（苧）。

[37] karaawi（韓藍）、karaobi（韓帯）、karakaki（韓垣）、karakadi（韓楫）karakörömo（韓衣）、karasuki（韓犂）、karatama（韓玉）、karafitö（韓人）、karamuro（韓室）など参照。

的に若干問題がある。なお日本語の numa に対してしばしば韓語の niph「沼」が対応語としてあげられるが、これは現代語の語形であって、中世語では例証されず、18 世紀初頭の資料に母音がことなる nup なる語形が見られるのみである」と述べている。

倭語の「沼」は nu R である。〈上代：551〉は、「隠奴（コモリヌ）の下ゆ恋ひあまり白波いちしろく出でぬ」（万 3935）を引き、「梶に対するカ、網のア、足のア、水のミ等々と同様、このヌもヌマの古い語形かといわれる」とし、また神代紀下の「ヌナタ」を「沼＋ナ（助詞）＋田」と解している。

15 世紀韓語の「水田」は、non H である。朝鮮半島では全体的に旱田を主とし、漢字使用でも、旱田を「田」、水田を国字の「畓」のように有標扱いする点で日本列島と異なる[38]。 福井玲（2020:15）は「意味的に若干問題がある」とするが、水田農耕が沼沢地付近や谷地のような低湿地を選好して行われてきたことを考えれば、「沼」と「水田」の意味差を「問題がある」とすることはないと思われる[39]。神代紀下の「ヌナタ」も沼沢地の田の意である[40]。

古代韓語の「水田」は、*nun と再建され得、倭語 nu R と母音が一致する。末子音とアクセントが問題となり得るが、次項の「身」と共に、倭語で末子音が脱落する例であると考えられる。BP2900 年頃に、列島の倭語話者集団が韓語話者から水田農耕を受け入れことを考えれば、韓語から倭語への借用語である可能性はあるが、BC1500 年ごろから朝鮮半島で韓語話者集団と共棲してきた大陸倭語の話し手である濊人が、本来的に水田農耕を知っていた海民＝内陸水系民であったことを勘案すれば、どちらの側からの借用語であるか決めがたい[41]。 また、双方に単語家族も見いだせない[42]。

4.11. 「身」

福井玲（2020:16）は、河野説の「mu ’身’ : mom’ 身’」について、「韓語の語幹末子音 m が日本語で消失している理由が明らかにならないと、それほど説得力のある対応例には見え

---

[38] 「田＝水田」「畑＝旱田」は韓語における漢字使用と逆である。しかし「畠」は全州伏岩里出土木簡の発見により、百済国字であったことが知られている。

[39] 「豊葦原の千五百秋の瑞穂の国」の美称は、水田農耕を目的にこの列島に渡来した大陸倭語話者のまなざしによるものであり、河川の中流域に定住し、河口の葦原を何とも思わず過ごしてきた縄文人のそれではない。

[40] 助詞のない「ヌタ 猪のぬた場、転じて料理名（低起語）」も水気を含むものである。『出雲国風土記』沼田郡の「以尓多水而御乾飯尓多尓食唑」の「尓多」も水気の多いことを示す。

[41] 伊藤英人（2021a）参照。

[42] Robbeets（2020:43）は韓語の deverbal inchoative 接辞として*-kʌ-＞*-k-を挙げ、nɨr-（増える）に対する nɨrk-（老いる）を例示している。筆者は*-k は動詞、名詞を問わずに付き「そのような状態である」ことを示す派生接辞であると考える。例：*per（火）＞*perk-（赤い）、*mer（水）＞*merk-（澄んだ）。すると韓語内部で*nun が*nu という交替形を持ち、それが*nuk-（湿った）を派生させたとも考え得る。*nuk-は現代韓語擬態語 noknok（じめじめ）に反照形を持つ。一方、倭語も「ぬかる　泥る」を持ち、やはり借用の方向は判然としない。

ない」としている。

倭語 mukafari HHLL（人質）のように mu は H であると考えられ、*mu-i＞mï＞mi H も同様に H であったと考えられる。15 世紀韓語 mom H とアクセントも一致する。

古代韓語の「身」を*mum H と再建すると、語末子音の有無のみが韓倭の差となる。後述の「梁」「鶴」等と同じく、倭語における語末子音脱落と考えられ、この語は韓語から倭語への借用語である可能性がある。

4.13. 「賺」

河野説の「suka-su ‘賺カス’ : sok-‘欺カレル’」について、福井玲（2020:16）は、「kufa-si ’美’ : kop～kof- ‘美’」「nuka-ru’泥ル’ : nok- ‘融ケル’」と同じように「用言の対応である点で注目すべきものであるが、上でも述べたように韓語の側では子音語幹なのに対し、日本語の側では（仮想的な）子音語幹のあとに母音-a-を介しているという点でこれらと共通点が見られる。意味的にもさほど問題はないが、ボイスの点で日韓で入れ替わっている点は若干気になる」と述べている。

15 世紀韓語 sok-L（誑）に対し、sukasu のアクセントは不明である。福井玲（2020:16）は「kufa-si ’美’ : kop～kof- ‘美’」「nuka-ru’泥ル’ : nok- ‘融ケル’」と共に「（仮想的な）子音語幹」と述べている。「美」「泥 : 融」は倭語への借用の過程で-a-が挿入されたと見ることが可能であるかも知れないが、suka-su は他動詞化若しくは使役の-a-su が接尾されている語形であると考えられる。したがってヴォイスの不一致は接辞-asu によるものと考えられる。suka-su を自動詞に戻せば suk-が得られる。大野晋他（1974:687）の「好キと同根。気持ちが傾くようにさせる意」という語源解釈を信ずるならば、韓語 sok-に「好」を意味する同源語が存在しないことからも、この韓倭対応語は偶然の一致である可能性があり、借用語であるとしても、韓倭のいずれが元であるのが不明である。

4.14. 「鯨」

河野説の「kudira ‘鯨’ : korai ‘鯨’」について、福井玲（2020:15）は「これは例えば*kodira ＞*korira ＞*korari ＞*korai のような metathesis を含む音変化を想定することになろうか」と述べている。筆者は韓語と倭語の共通の祖型 *kudadi を再建し、倭語において metathesis が生じたと考える。すなわち、以下の如き音韻変化を措定する。

*kudadi ＞ *kurari ＞ korai 15 世紀韓語
＞ *kudadi＞ kudira（metathesis, lenition）古代倭語

アクセントは 15 世紀韓語 LL、倭語 LHL で低起である点で共通する。

BP38000 年にホモサピエンスが東ユーラシア沿海地域に到着して以降、否、海水面が 100

メートル以上急上昇した完新世以降だけでも、数多の言語集団が東アジア沿海地域に到達し、それらの言語の大半が痕跡を留めずに消滅したと考えられる。「鯨」の語を持つのは、内陸ユーラシアから東進してこの地に至った言語集団ではなく、海伝いにこの地に至った集団であると考えられる。その点では大陸倭語の話し手である濊人が齎した語である可能性の方が高いが、両言語に単語家族が存在しないことからも、「鯨」の語は何等かの先住民言語の語である可能性を排除できない。

4.15.　「梁、門」

『訓蒙字会』（1527 年）に「梁　torH ryang 水橋也　又水堰也」とあり、16 世紀に「水橋」「水堰」を torH と言ったことを知り得る。『三国史記』巻四十四に「栴檀梁　城門名　加羅語曰門為梁云（栴檀梁は城門の名である。加羅語では門のことを梁と言ったという）」とあり、上の『訓蒙字会』の訓を参照すれば、伽耶韓語では、「梁」は tor の古代語形で訓読されたと考えられる。また『三国遺事』巻一に「沙琢漸琢等　羅人方言読琢為道　故今亦或作沙梁　梁又読道（沙琢や漸琢等、新羅人の言語で琢を道と読む。ゆえにまた沙梁とも書くが、梁は道と読む）」から三国新羅語では「梁」を「道」の字音に近い音で訓読みしたことを知り得る[43]。

15 世紀韓語 torH の説明である「水橋」「水堰」、また「梁」の意味である「橋」「築」から考えると、河川や海峡の幅が狭く、人工物が設置されることもある場所を指す語であると思われる[44]。

『三国史記』の記述はさらに興味を引く。加羅すなわち伽耶の言語では「門」全般を「道 to」と言ったということであり、狭い水路もその意味範囲に含まれる派生義であることになる。

倭語 to H は〈上代〉によれば「門、戸」の他、「海岸や河口の、両岸が迫って門のようになっている地形」（ibid.:485）という意味がある。仁徳記に「由良の斗（と）の斗中（となか）の海石（いくり）：由良の海峡の中の岩礁」、『万葉集』3894 に「淡路島刀（と）渡る船の梶間にも：淡路島の海峡を渡津船の櫂をひと引きする間にも」とあり、「斗」や「刀」は古代倭語 *to H を借音表記したものである。

伽耶語「梁」『三国遺事』の「道」を考え合わせると、この語は倭韓の間の「o：o」の関係となり、上の諸例に見られる「*u＞o：u」のような韓語における母音推移を想定し得ない例となる。倭語の mito HH（＜水＋門）「水の出入りするところ。河口など」〈上代：711〉minato HHH（＞水＋の＋戸）「水の出入りするところ。河口、湾口、海峡など。河口などで

---

[43] 夙に梁柱東（1942）がこのことに言及している。また、ソウルの鷺梁津は、noriangcin（露梁津）、notocin（露渡津）、noriangcinto（鷺梁津渡）、notirnaru などと称され、「梁」は「渡」と同音である。notir は*notor からの音韻変化であろう。

[44] 朝鮮半島全体で「梁」や tor, tir のつく地名の地形を見る必要がある。

船の碇泊するのに適したところ」(ibid.:713) のような船舶の出入り口に関する複合語を多く持つ一方、列島でも朝鮮半島南端でも地上の「門・戸」を指すという意味の共通性からも、両者は関係語と看做し得る。子音終わりの音節を許す大陸倭語形は*tor であったかも知れない。

仮に 15 世紀韓語 tor H の古代韓語形を機械的に再建すると、*tur になる。古代倭語の「津」tu L は「船の泊る所。船着き場」〈上代：457〉であり、アクセントは異なるものの、「梁」との関係を考える必要がある。

河野六郎（1979:339）は「川」を意味する諸方言形の内、「tor 系統」に分類した toraŋ（京城他）について「此等の語は多くの場合、‘水田に水を引く溝’の意味に用ゐられるが、又一般に溝、或は更に小川の義にも用ゐられる」と述べている。15 世紀韓語は torang LL でアクセントは一致しないが、恐らく「梁」と同源語であろう[45]。

「梁、門」に関しては、韓→倭、倭→韓のいずれの借用か判断し難い。しかし、港津を管理し、海上交通に深く関与した濊人にとって海上交通の出発点となる「港 minato HHH」は極めて重要である。倭語 *mura（集落）が古代韓語に借用されたように、*tor も倭祖語から韓語への借用語ではないかと考えられる[46]。 倭語には上述のような複合語が見られることも倭語→韓語の借用関係を仮定する可能性を示唆する。

4.16. 「雲、晦、暮」

服部四郎 (2018:322) は、「先日本祖語」から「日本祖語」への「雲」に関する変化を「**kurmu ＞*kumu（あるいは*kurmu）として示している。

この語や以下の「鶴」「口」は、古代韓語の *y 古代倭語の*u の対応関係に関するものである。

15 世紀韓語の「雲」は、kurumHH～HL である。これは、*kur-um と分析され、動詞語根に動名詞派生接辞-om/-um が付いたものと考えられる。仮にその古代韓語形を再建すると、*kyrym が得られる[47]。母音推移を前提とする本稿では、河野説の「ü」を暫定的に[y]とした。

すると、倭語の u を韓語が y で、若しくは韓語の y を倭語が u で借用した、という対応関係が生じる。

15 世紀韓語には「曇る」を意味する*kur- H という動詞語根は存在しない。
一方、古代倭語には、kuramasu HHHL（晦ます）、kurasi HHL（暗し）、kuru HL（暮る）、kure HH（暮れ）など、「暗、晦、暮」などの意味を持つ語根{*kur-H}があって、声調まで含めて、

---

[45] 福井玲（2020:15）が否定する「kuro ‘畦’：kor, korang ‘畦間の溝’」は、その指摘する意義の差から関係語と看做され得ない。

[46] 伊藤英人（2021a:48-53）は、3 世紀から三国期にかけて「牟盧＞牟羅」の表記で現れる濊倭祖語*mura（集落）が慶尚道、全羅道の沿海部地名に見られ、古代韓語に借用されたことを指摘した。

[47] 古代韓語の母音調和は詳細が不明である。Lee & Ramsey（2011:68）参照。

15 世紀韓語*kur- H と一致する。

単語家族の根の張り方からみて、倭語の語根*kur- H が韓語に借用されたと見るのが妥当である。韓語の文法・造語接辞が後置される点で、後述の「朝 achʌm LH～LL」と共通する[48]。

4.17. 「鶴」

鶴を意味する現代韓語 hak は言うまでもなく、中国語の借用語である。一方、固有語の turumi は、ハングル創製直後の文献である『月印釈譜』に「鶴」の訳語として登場する。アクセントは、turumi HHH である。

古代倭語の「鶴」は tadu LH であるが、一方、「相ひ見つるかも」を「相見鶴鴨」（万葉集 81）と表記した万葉仮名が見え、「鶴」の訓に turu が存在したことを知り得る。古代倭語は turu LF である。

倭語の turu LF と韓語の turumi HHH に関係があるだろうということは多く述べられてきた[49]。 turumi の末尾の-i は「蛙 kaikori」「蝉 mʌiyam～mʌiyami」などの動物名に多く見られる接尾辞である可能性が高い。古代韓語の*tyrym が倭語に借用されたと考えられる。

*mum→mu（身）、*nun（水田）→nu（沼）、*tor→to（梁、門）などと同様の語末子音脱落であると思われるが、倭語は低起語であり、アクセントの類が一致せず、また語末音節の下降調の理由も定かでない[50]。

4.18. 「口、顎」

河野六郎（1945/1979：138）では、「顎」を表す thək（原文表記は턱）の済州島方言形 thak（原文表記は탁）について、「済州島西帰浦で[agult'ak]、城山浦に[agut'ak]と agul-, agu-と結合して現れてゐる」と述べ、それについての脚注に「此の済州島方言形が国語のアギ、アゴに類似しているのは面白い」と述べている。 agul-, agu-のうち、後者は舌音の前で流音が脱落する現象であるため、agul-の方が古い語形であると看做し得る。

現代韓語の akari「口：卑語」、akuŋi「オンドルの焚口」、15 世紀韓語 akui LH「口」などから、その原義は「口」であったと考えられる[51]。 古代韓語形を *akyr～*akuri と再建し得る。

河野六郎（1945/1979：138）の言う倭語「顎」との関係はどうであろうか。〈上代：7〉は、「あぎ」の意味として「①上顎、②魚の鰓」を与えている。仮にこれが韓語 *akyri か

---

[48] アイヌ語 niskur（雲）、kunne＜kur.ne（黒、暗）も考慮すれば、√kur-は倭韓アイヌ共通語根になる。

[49] 一例として長田夏樹（1963-1964/2011）「東雅臆度抄」参照。

[50] 語末の-m の消失の代償としての下降の可能性は排除できない。

[51] 韓語 akʌri「口：卑語」の存在を知ったラムステッドが韓語のアルタイ語族への所属を確信したことは夙によく知られる通りである。現代韓語 akui～aku（鮟鱇）も同源語であろう。

らの借用語であり、かつ、y : u の対応関係であったとしたら、*akyri＞*akuri＞*akui＞*agï のように乙類の「ぎ」が期待されるが、「ぎ」は甲類である。またアクセントについても 15 世紀韓語が LH であるのに対して、倭語は HH である。

〈上代：9〉には「あぎとひ：幼児が片言を言う」「あぎとふ：①顎を動かす。幼児などが片言を言う。②魚が水面近くに浮き出て呼吸する」との記述があり、口を開けることに関して「あぎ」をその要素に含む語が用いられていることが分かる。「口」から「顎」への意味変化はあり得るものかも知れない[52]。

アルタイ諸語との系統論で繰り返し言及されてきたこの韓語「口」も、「アルタイ語族」仮説が否定された今日では一種の放浪語的なものと考えるべきかも知れない[53]。

4.19.　「朝」

15 世紀韓語に ach-L という形容詞がある。「少ない・稀だ」という意味で、この形容詞の連体形が複合語を作り、achʌnsəsnar LLLL（徐夕）、achʌnstʌr LLH（姪）、achʌnatʌr LLLH（甥）などの例が認められる。「よりふけていない」という共通語義を抽出することができる[54]。ach-L の名詞形が achʌmLL～LH（朝）である。

倭語には fuku（更ける・深くなる）の反対語 asu（浅くなる）という動詞がある。それぞれが fuka（深）、asa（浅）という情態言を作る。時間が「より更けていない」時間帯が「朝」である。

15 世紀韓語と同じく低く始まる語根である。

15 世紀韓語 achʌm は LH だが、achʌmnacoh（朝夕）のような複合語では LL で現れる。上述の動詞 ach-に名詞形成接尾辞-ʌm が付いたものと解し得、その古代韓語形は atsʰəm と再建される。古代韓語の破擦音では/ts/と/tsʰ/が音韻論的に区別されたと考える[55]。　古代倭語の/sa/は音声的には[tsa]であったと考えられる[56]。

両者に共通するのは語幹部分のみであり、共通する語根に韓倭それぞれの派生接辞が付いている。恰も古代韓語*kyr-ym（雲）と倭語 kur-a（暗）の如くである。「朝」の現代京都ア

---

52 「インドヨーロッパ祖語の「顎」*genu-は、古アイルランド語では「口」gin になる。https://www.etymonline.com/参照。

53 Starostin, et al.（2010:274）の再建するチュルク祖語形 *Agiŕ（1 mouth 2 lip, lips 3 mouth of a river, of a cleft）、モンゴル祖語形*ag, *aguj（1 cave, grotte, pit 2 crack）参照。このような基礎語、身体語彙が放浪語であるというのは例外的だが、「口、顎、口や顎の大きい魚類、洞穴、焚口」などの意義を持つ東ユーラシア共通の語であった可能性を考え得る。

54 azʌ＞au（弟）と語根を共有する可能性がある。

55 Lee&Ramsey（2011:65）参照。

56 『在唐記』などの梵字対音資料のみならず、夙に 5 世紀の稲荷山古墳出土鉄剣銘の「加差披余カサハラ」「多沙鬼獲居タサキワケ」に見られるような初母と山母の、すなわち破擦音と摩擦音の通用が見られる。

クセントの第 2 音節下降は韓語とは関係がない。

4.20.「媤」

「媤」は「夫の家の人」を意味する朝鮮半島の国字である。字音は sii で、形声要素の「思」は、「思」の伝来漢字音 sʌ よりも古い字音を保っている。

伊藤英人（2020:88-99）で詳述したように、河野六郎の「男」を意味する韓語についての論は時代によってその内容を変えてきた。河野六郎（1945/1979Ⅱ:288）では、朝鮮半島中部以北に分布する「男児」を意味する sanaiai 系の語、『鷄林類事』「士曰進寺儘反」、「王子」の紀古訓「セシム」及び 15 世紀韓語の「男児」 sʌnahʌiLLH～ snahʌiLH などから「男」を意味する「扶余語」形態素 *sin～*sen を再建した。そのうえで「国語セ背・君」とも親縁関係があるとした。河野六郎（1957:1980:1-53）では、この語を含む一連の語を「倭人の痕跡」と捉え直し、河野六郎（1987）では、*sin～*sen を「百済民衆韓語」と看做すに至った。すなわち、非韓語系語彙でなく韓語の語であると認定するに至ったのである。

〈上代：396〉は倭語の「せ」について「夫・恋人・兄弟・友人など広く男子を親しみ呼ぶ称」とする。倭語のアクセントは L～R～H のように一定しない。

河野六郎は*sin～*sen を 15 世紀韓語の sʌn-とのみ関係づけているが、筆者は、後代韓語の sii の遡及形と併せて、*sei～*sen を再建する。前者については、声符「思」が再建の手掛かりとなる[57]。この語は韓語から倭語へと借用された語であると思われる。

4.21.「寺」

福井玲（2020）は、「寺」について、「借用であった可能性が高い」（ibid.:24）とし、「日本語の tera と中世韓語の tjer は上で見たように一見［島］の場合と並行しているように見えるが、去声（H）であって、［島］の場合の上声（R）とは異なる。もし、これが*tjera のような 2 音節語に遡るとしたら上声であってもおかしくないが、なぜ去声となっているのかは説明が必要である」（ibid.;25）と述べている。

伊藤英人（2008:465）は「筆者推測早期漢語借詞’tiər’也有可能在百濟語中襯音（epithesis）之後，再次流入倭語中而變爲’tera’。（あるいは早期漢語借用語’tiər’が百済語において語末音添加されたあと倭語に借用されて’tera’になったものかも知れない）」と述べたが、百済語若しくは百済韓語における語末音添加の明確な例が他に確認されていない以上、これは臆説に過ぎないと現在では考えており、茲に修正する。すなわち、-a 添加が倭語への借用で生じたと考えるものである。

「寺」は新物新語であろう。そして歴史的経緯から考えて百済語若しくは百済韓語から倭語へと借用されたと考えるべきである。

---

[57] 15 世紀韓語 sʌnahʌi から*sen を再建することには妥当性がある。一方、南部諸方言「女」の kasina と紀古訓「カシ」、15 世紀韓語 kas などを比べて*kasin でなく*kasi を再建すべきではないかとも考えられるが、-n の正体が不明となる。

「狭母音＋子音韻尾」に-a が添加される万葉仮名に「信シナ」「飾シカ」があり、倭語への借用の後に-a が添加されたと見る方が妥当である。

4.22.「釜」

「竈」を意味する倭語は kama HH である。〈上代：217〉は「かま」について「かまど、食物を煮たり、土器や瓦を焼いたりするために火を焚くところ」という語義を示し、「飯をたくための器をさした例は、『常陸国風土記』のものがそれかと疑われる程度で、確例がない。カマは通常住居内に設けられ、焚き口と煙出しの穴を備えているが、その穴をクドと称した旨の記載が和名抄（＝倭名類聚抄）にある。このほか、土器や瓦を焼いたカマは、焚口・火床・窯室・煙道から成った大がかりなもので、その一例として藤原宮の瓦を焼いたかまの跡が、藤原宮址の南方に完全な形で残されている」と記述している。　『常陸国風土記』の例は「并品宝弓桙釜器之類」で、「弓」や「鉾」と列記される「器」なので、動産としての「釜」と看做すのが妥当であろう。このように、倭語のカマは、「屋内もしくは屋外の火を焚くために設営されたもの」というのが原義のようである。

定住革命以降に一般化した竪穴式住居以来、住居の中心に穴を掘り、家に延焼しないように灰などで覆った加熱施設は稲作渡来以前から存在し、1 万数千年前に土器を作るようになってから、土器焼成のための施設も使用されてきたはずである[58]。上で述べたような藤原宮の窯は、朝鮮半島から伝えられたものであろうが、「食物を煮たり、土器や瓦を焼いたりするために火を焚くところ」をさすカマの語がそれにも使われたと考えられる。これらは、カマ（釜）、カマド、カマ（焼き物窯、窯元のカマ）として現代倭語に語義、語形ともにそのまま残っている。

15 世紀韓語で「釜」は kama LH と称した。「釜」のみならず、「鍋」「鑊」その他の鍋釜状の調理器具も kama LH である。『翻訳老乞大』に、中国人が高麗人に肉の炒め方を教えるくだりがあり、「刷了鍋着（鍋をかき回して）」を kama siskirkko と韓訳している。この「鍋」は明らかに中華鍋状の鍋を指している[59]。

「竈」を意味する 15 世紀韓語の例は『救急簡易方』に「竈下」を kama mit と訳した訳文に見られる。これは竈の下に永年溜って赤黒くなった土の塊を表す「竈下黄土」に関する言及である。これは現代韓語では puttumak と呼ばれる煮炊用の竈であり、焼物焼成用の窯ではない。現代韓語では窯を kama と呼ぶが、竈を kama とは呼ばない。窯を kama と呼ぶ例は、1820 年頃成書の柳僖『物名攷』に kiris kupnɨn kama の例が見られる。

---

[58] 定住革命については西田正規（2007）参照。

[59] 遥かに後代の倭語借用語であるため、本稿の対象とならない「鍋」を意味する nampi は、倭語「なべ」の借用語である。倭語内部で「金＋瓮 かな＋へ kanafɛ：鼎」と同様に「菜＋瓮　な＋へ 鍋」と分析が可能であることからも本来の倭語であり、近代以降の韓語への借用語であると考えられる。朝岡康二（1993）は、韓国の naimpi（原文：냄비）が卓上加熱用の、現代ではアルミ鍋をさすことが多いこと、その他多くの理由から、外食文化から家庭に持ち込まれたであろうと推論している。

韓語の「釜」にはほぼ同義語の soth L があり、後述の如くこちらが本来の「釜」を意味する韓語であったと考えられる[60]。

韓語 kama LH は韓語内部に単語家族を持たない。倭語 kama HH とはアクセントが一致しない。語義、語音の著しい類似から借用語であると思われるが、その方向は判然としない[61]。

4.23.「蟹」

現代韓語の「蟹」[ke:]は 15 世紀韓語では kəi R であった。済州語では、keŋi（西帰浦、城山浦）、kiŋi（済州、大静）であり、平安北道方言では kəŋi である。こうしたことから、河野六郎（1945/1979 I :233）は、15 世紀以前の「蟹」の語形を「거니[kəní]」と再建した。[kəní]を、本稿の表記に直せば、kəni LH となる。上述の「瓜」同様、LH＞R の変化を蒙ったと考えられる。

河野六郎（1945/1979 I ）が 15 世紀より古い「蟹」の語形として再建した kəni を、母音推移を勘案してその古代韓語形を再建すると、*kɛni になる。

倭語の「蟹」は 8 世紀資料で kani である。『万葉集』3886 番に「河尓」の表記があり、平安時代アクセントは HH である。

8 世紀大陸倭語の「蟹」の例は文証されないが、仮に古代倭語と同じ kani であったとすると、古代韓語との借用関係はどうなるであろうか。

次のような音韻変化を仮定する。

倭祖語　*kane ＞ 8 世紀大陸倭語 *kani
＞ 8 世紀倭語 *kani
＞ 九州・琉球祖語 *kane ＞現代九州語・沖縄語 gane・gani
古代韓語 *kɛni ＞ 前期中世韓語 *kəni ＞ 15 世紀韓語 *kəi ＞現代ソウル韓語 ke:
＞ 済州語 keŋi～kiŋi

倭祖語から大陸倭語及び古代倭語までの間に第 2 音節における半狭母音の狭母音化（MVR, mid-vowel raising）が生じ、それを借用した古代韓語において Umlaut が起き、後代の韓語「蟹」の諸語形に変化したと考えられる。古代韓語 *kɛni が、倭語に借用されて*kane ＞*kani になる可能性はあり得ない。この一点においてもこの語が倭語から韓語への借用語であることを知り得る[62]。

---

[60] 「鼎」の訳語に多く見られることから或は脚付きの釜の称謂であるかも知れない。

[61] 以下はあまりにも臆説であるが、kamafu LLF（組み立てる）を*√kam-に持続を意味する接辞-afu が付いた「ハ行延言」的なものと考えれば、「組み立て状態を保ったもの＝窯、竈」として*kama という情態言をその語源と考えることも或は不可能ではないかも知れない。しかし、kama HH とはアクセントが一致しない。

[62] 海民・内陸水系民である濊人・倭人の語であり、記紀万葉歌にも頻出する「蟹」が、倭語

4.24.「和、柔、親」

古代倭語に niki～niko の語がある。niki-sine（にきしね：籾を取ったコメ、アラシネ：籾付きのコメの反対語）、nikitafɛ（にきたへ：柔らかい布）、nikitama（にきたま：親しむべき温和な魂）、nikifada（にきはだ：柔らかい肌）、nikimɛ（にきめ：柔らかい海藻）、nikibu（にきぶ：慣れ親しむ）、nikogusa（にこぐさ：柔らかい草）、nikosi（にこし：柔らかで穏やかだ）、nikomu（にこむ：やわらぐ）、nikoyakani（にこやかに：温和に）のような複合語や派生語が多く存在する。共通して抽出できるのは「荒々しくなく、柔らかくて温和な、親しむべき状態になった」という意味である[63]。アクセントは HH である。

一方、15 世紀韓語には語根{nik-L}がある。nikɨnsir LHR（熟糸）、niki LH（慣れて、熟知して）、nik- L（煮える、熟す）、niki- LH（慣れさせる、練習する）、niksuk- LL（慣れる）などがそれである。これらは現代韓語の ik-, iksukha-, ikhi-などに残っている。

古代倭語でも 15 世紀韓語でも「生の、素材そのものの、あまり慣れ親しんでいないものを、頻繁な接触や加熱を通してなれ（慣れ、馴れ）させ、親しい、人を脅かさない穏やかなものへと変化させた状態」を表す語で、両者の間には根源的な共通する意義が存在する。そのうえ、古代倭語の niki～niko からは、語根{nik-}が抽出でき、アクセントを除いて日韓共通語根になっている。上述の「朝」や「雲、晦、暮」もそうであるが、もし、こうした共通語根が大量に発見できたなら、倭語と韓語の間に系統的な親族関係が存在することの証拠になり得るが、あまりにも僅少である。

両者は借用語の関係にあると考えられるが、どちらからどちらに借用された語であるか、判断できない。

4.25.「葵」

古代倭語の「葵」は afufi HHH である。15 世紀韓語では aok LH だが、慶尚道、咸鏡道方言 apuk と言うため、aok LH は、*apok＞*apuk に遡ると考えられる。

古代倭語は*apupi に遡ると考えられる。「鼓」を意味する 15 世紀韓語 pup H が現代韓語で puk となったように、*apuk～*apup の語形が存在したとすれば、倭語がこの韓語*apup を借用するに際して、語末母音-i を添加させたと考えることが可能である。但し、韓語が低起語であるのに対して、倭語が高起語である点が一致しない。

から内陸農耕民である韓語話者に齎されたことは納得し得る経路である。

[63] 「にきたへ」には「たへ」が含まれる。福井玲（2020:24）は「しろたへ」について、「日本語の[へ]には布の意味をもつ語はないと思われるので、朝鮮語の*takpoi に由来する借用語である可能性があるのではなかろうか（poi は[布]）。なお[タへ]の[へ]は乙類である」と述べている。

4.26.「束」

現代倭語の「束 たば」の古代倭語形は tabari～tafari である。声調は不明である。一方、現代韓語では「束」を tapar と言うが、この語は近代以前の資料からは確認されない語であるようである。資料には出ないものの、古代からこの語が韓語に存在したとしたら、「葵」と同じように韓語から倭語への借用に際して-i が添加されたものと見ることが可能である。一方、古代倭語には tabanu（束ねる）の語が存在する。〈上代編：437 は「タバヌに対し、タバルという動詞があり、その名詞形か」としている。

一方の韓語では「束ねる」は、musk-を用い、tapar の単語家族は存在しない。しかし、やはり、韓語の tapar が倭語に tapari として借用され、〈上代：437〉の述べる如く*tabaru という動詞が存在したとしたら、この動詞は、名詞 tabari から作られたと考えるのが妥当であろう。語末母音添加からも、韓語から倭語への借用語であると看做される。

4.27.「稗、稲」

遠藤光暁（2022：25－26）は、日本語のヒエと韓語の pjə（벼）～pe（베）を、共に中国語「稗」からの借用語と看做している。また 6 世紀の山城である咸安城山山城木簡出土の荷札に見られる「稗」の文字を「イネ」と解釈する可能性を論じている。稲作の盛んでなかった朝鮮半島中部・北部ではヒエを表す語がイネを表すようになったのに対して、稲作の盛んであった南部ではイネとヒエを区別し n-系の語をイネに用いたのだろうと推定している。

筆者は遠藤光暁（2022）の仮説に同意する。もともと、稲作に先行して中国東北部から朝鮮半島、日本列島に伝えられたのは雑穀栽培であった。朝鮮半島南部と日本列島は稲作渡来以後、イネが他の穀物を圧倒していくが、朝鮮半島中部以北では現在に至るまで、イネは相対的に優先されるものの、他の穀物も重要なものとして栽培されるづけ、「五穀」が日本に比べて平等に重視されている。

遠藤光暁（2022）の引用する現代韓語でなく、15 世紀以前の語形と古代倭語のそれを比較してみよう。15 世紀韓語の「稲」は piə H である。15 世紀韓語の iə は、古代韓語の*iɛ と*iə の二つに遡り得る。例えば「八」iətʌrp は 15 世紀直前の段階で＜*iʌtʌrp に遡ると考えられ、古代韓語の*jətərp に遡及すると看做し得る。古代韓語の「稲」は *piə～*piɛ、もしくは metathesis 形*pəi～*pɛi であったと考えられる。これは遠藤光暁（2022）の述べる如く「稗」の上古音*p（r）ăi からの借用語である可能性が高く、その意味は「稗」であったと考えられる。

古代倭語の「ヒエ」は fiye HH であり、それは*piye に遡る。これは、韓語の*piə～*piɛ からの借用であると考えられる。朝鮮半島では意味が「稲」に変化したが、日本列島では原義を保った。

では韓語で「稗」を表す phi はどこから来たのであろうか。15 世紀韓語は、phi H で、この語は『訓民正音解例本』に例として示された語である。筆者は、この語は漢字「稗」の誤った読み方から来たものだと考える。「稗」の韓国漢字音は phai であるが、これは「卑」を

声符とする字の内、唯一 ph で始まる字音である。一方、卑婢脾碑などはすべて pi である。母音の部分は「卑」に引かれて-i となり、一方、正しい字音 phai の声母は残存して、中間的な phi ができるという一種の contamination が生じたと考えられる。倭語*piye は古代韓語からの借用語であると考えられる。

4.28.「子」

現在まで繰り返し言及されてきた古代倭語 ö [ə]と 15 世紀韓語 ʌ、すなわち古代韓語*ə の対応である「如」や「鶏」などについては本稿で何ら付け加えることはない。ここでは河野六郎（1945/1979:190）などで示唆された 15 世紀韓語 ʌ と古代倭語 o〜a の対応についてみてみたい。まずは、15 世紀韓語 ʌ と古代倭語 o の対応である。

河野六郎（1945/1979:190）は次のように指摘する。韓語の親族名称は、apəci（父）、api（父）、acəssi（叔父）、akassi（嬢）、acuməni（叔母）ように接頭辞 a-を多く持つが、これらは「人倫を表す接頭辞」と看做されるとする。上記の語を含めこれらには、əmi, əməni（母）を含め、接尾辞-i が共通している。そこから「子」を意味する韓語をと析出し、*a- 接頭辞、*-i を接尾辞を取り外した「子」の核心部分を*gʌ と再建した。

さらに崔致遠（857〜？）の「聖住寺朗慧和尚白月葆光塔」碑文の

誕大師阿孩注云方言謂児与華无異

について触れ、方言（新羅語）の「子供」は中国語の「阿孩」と同じ言い方をするという記述について詳しく述べている。当時の「阿孩」の中国語音は*â-ɣâi であったこと、現代語諸方言 akɨ,ɛki, 標準語の aki（嬰児）などの存在から、「子」を表す固有語*agʌi が再建されている。河野論文では触れられていないが、崔致遠は中国語*â-ɣâi と韓語*agʌi の音相の偶然の類似から、「与華无異」と言ったと推察される。

現代韓語に至る「子」の音韻変化を次のように再建できる。

*agʌi＞ahʌi　15 世紀韓語）＞ ai 現代韓語

一方、「g＞h＞ゼロ」の変化を経なかった語形が「嬰児」の意味の諸方言に残ったと看做し得る。

河野論文の*gʌ は、本稿の表記では*kʌ となる。河野六郎（1945/1979:190）は、これを「国語コに近づく」と述べているが、古代韓語形は*kə になる。

一方、上代倭語の「子」は ko であって kö ではない。声調は 15 世紀韓語 ahʌi が LH、古代倭語は H で、矛盾しない。

一方、福井玲（2020:27）も指摘する「高句麗地名」の「子：仇」の問題も併せて考えるべきである。「仇」は大陸倭語として*ku と再建されるが、これと古代韓語 *kə 及び古代倭語

の ko の間の相互関係をどう考えるべきか、尚後攻に俟つ。

4.29.「日」

倭語で「日数」を表す語に「カ　ka」がある。現代倭語では「ふつか」「みっか」のような複合語に-（u）ka～-ka という形でしか現れないが、上代倭語では自立語であった。「迦賀那倍弖 kaga nabëte」は「日数を重ねて」という意味で、『古事記』中で、でヤマトタケルに対する火焚き番の翁の返歌に出る有名な歌「新治、筑波を過ぎて幾夜か寝つる」に対して「かがなべて夜にはここの夜、日には十日を」に見られることは広く知られている。ここで「夜」を「九夜ここのよ」と数え、「日には十日（とおか）を」と言っているように「か」は「日中の時間」のみを指すようである。すなわち太陽の出ている時間帯を「か」と言ったと解釈できる。

大野晋他（1974:277）は、「限る」に関して「カ（日）＋キリ（切）の意味で日限を切るのが原義」とする。

河野六郎（1945/1979：190）は、やはり脚注で、15 世紀韓語の hʌi（太陽）との関係に触れ、hʌi の-i を「後接辞」とし、「国語」「か」及び「こよみ koyömi」の「こ」と比較している。「太陽」の古代韓語形は*həi と再建されるため、上述「子」と同じ音韻対応が仮定されている。「か」と交代するのは一般的には kö であるため、ここでも古代韓語＊ə と倭語 o～ö の関係、さらには a の関係が問題になる。

更に〈上代：279〉は、「日数 け」を立て、有名な「君之行 氣長久成奴 山多豆乃 迎乎将往 待尓者不待」の kë や fi ni kë ni（日増しに）の例を挙げる。

この kë を仮に　ka-i（-i は絶対接尾辞）と解し得たとしても、ka～ko の交替は韓語からの借用では説明できない。後述の「為」で見るような倭語における Ablaut の問題抜きには充分な考察は不可能であろう。

さらに、 河野六郎（1945/1979：190）のこの比較は、有声音間でない語頭での韓倭間の h:k の対応である。このことは、Whitman（2011:30）の仮説と共に次項で検討する。

4.30.「為」

Whitman（2011:30）は、韓倭同系論の立場から、韓語 h-が、倭語の s（i と j の前で）及び k（それ以外の前で）に対応するとし、韓語の「為」*hjə と倭語 *se を比較している。さらに*hjə*と*sik（want）の関係の可能性にも言及し、上代東国倭語の形容詞連体形語尾-ke が'light verb'である韓語の「為」から来た可能性を示唆している[64]。

---

[64]. Ibid.:31 上代東国倭語連体形語尾-ke が八丈語に残ることは夙に知られている。例：ナカノ　ヨーケ　コドモタズノ　仲の良い子供たちの」金田章宏（2021:262）。風間伸次郎（2021）の述べるように、日本列島に最初に広まった倭語が八丈型であったとしたら、形容詞連体形語尾は朝鮮半島における韓語との接触を経て大陸倭語へと借用されたものが列島に広まったと考えられる。8 世紀中央倭語-ki への変化は MVR で説明できる。

伊藤英人（2021:60）及び本稿 3 章で示したように 8 世紀大陸倭語の再建子音体系に/h/はなく、韓語/h/は大陸倭語/k/で借用されたと考えられる。

Whitman（2011:30）が同源と看做した韓語*hjə と倭語 *se を、筆者は韓語*hjə が倭語 sö として「借用」されたと考える。*se は倭語内部での sö の交替形であり、ちょうど「背く sömuku」と「背 se」の関係に同じい。「そ」は「な＋連用形～未然形＋そ」の形で禁止を意味する。

本来、韓語のような用言の活用を持たなかった倭語は韓語の*hjə を動名詞として受け入れた。未然形も本来は情態言という動名詞であり、ゆえに「なせそ」は「禁止＋doing＋doing」が原義であろう。

Whitman（2011:31）の*sik-について言えば、これは 15 世紀韓語の siki-（させる）、sik-pi-（したい）などから見て'want'ではなく'do'の意味に解するべきである。音節末の-k と*hjə との関係はなお一層の考察が必要である[65]。

「為」の機能面での韓倭の類似を見てみよう。吏読文、朝鮮変体漢文で「令」は「尊敬」の意味に用いられる。金文京（2011:49）は洪仁祐（1515-1554）が李退渓（1501-1570）に宛てた朝鮮漢文を引用し

> 例えば「前承令枉」は、「以前わざわざ来ていただいて」という意味だが、正規の漢文なら「前承枉顧」とでもいうべきところで「令」は必要ない。この「令」は韓国語の敬語を表したもので、韓国の代表的な変体漢文である吏吐文では「令」の字が「令是 siki させる」「令是亦 sikieo」のように使役の意味で使われているところから、使役から敬語の「si」に転用されたものと考えられる。（ibid.:47-48）

倭語「す」も使役、尊敬に転用されるが、これも韓語の用法を真似たものであると考えられる[66]。

また、否定語＋「為」が塊をなして否定要素になる形式も恐らく韓語の真似であろうと思われる。八丈語の

ハナシンジャララ
ハナシ　ニ　　シ　アリ　アロワ
話　　否定　do　存在　存在
話さなかったよ　　金田章宏（2021:271）

---

[65] 仮に*si が*hjə と同じく「為」の意味であるなら、この-k こそ deverbal inchoative（Robbeets2020:43）というべきであろう。なぜなら「させる」も「したい」もこれからのことだからである。しかし、*si と*hjə の語形の関係の説明はついていない。

[66]15 世紀韓語の尊敬接尾辞-si-は古代韓語*-si-に遡ると考えられるため、15 世紀韓語の尊敬接尾辞との関係は今後の課題として慎重な考察を要する。

は、現代韓語の

mar　ani　　ha-iə　（i）ss-（i）ssə
話　　否定　do 存在　存在
話さなかったよ。

と同じ表現である。

伊藤英人（2021a,b）で詳述したように、大陸倭語は本来的に孤立語型声調言語であり、朝鮮半島における韓語との接触を通して韓語化したと考えられる。韓語が古代以来、一貫して整然とした体系性を示すのに対して、倭語はパッチワークのように自前の若くは韓語の素材の断片をつなぎ合わせて、韓語型の表現を何とかできるまでに変化、成長したと思しき痕跡が著しい[67]。本来、名詞である形容詞に「為」の韓語*həj が倭語-ke＞-ki として借用され、若しくはやはり同語源の-si を借りて何とか連体修飾語尾を備え、さらには存在動詞の助けまで借りて、韓語のように形容詞の動詞化を図ろうとした点などに顕著にみられる[68]。

ただ、サ行変格活用、四段活用、さらには古代東国倭語などの連体形母音-o のみならず、「刈る～切る～刳る～こる（樵）」と「き～こ（木）」などの Ablaut の問題は伊藤英人（2020:105）で言及した韓語における Ablaut と併せて今後の課題である。

倭語が如何に「韓語化」したかについては、近々に稿を改めて論ずる予定である。

5. 結語

韓倭間の借用関係を纏めると以下の如くである。

韓→倭は韓語の、倭→韓は倭語の再建形を示す。借用関係の不明なもの、放浪語等の可能性のある語は考え得る再古形を示す。

韓語から倭語への借用

---

[67] 韓語の連体形（動名詞形）は古代以来一貫して{-n}（既然）と{-r}（未然）であるが、倭語は継ぎはぎによる。なお、この{-n}（既然）と{-r}（未然）は、体言語尾における{-n}（～は）と{-r}（～を）と並行的である。「既然」と「既知」、「未然」と「（これから）対象に何らかの他動的侵襲（空間貫通を含む）を加える」という意味は共通する。なお、倭語の「を」の語形はツングース語からの借用の可能性がある。

[68] 韓語の cohasssɨpnita, cɛmiissəsssɨpnita が書き言葉として何ら不自然でないのに対し、同義の倭語「よかったです」「おもしろかったです」が仮に書き言葉として連続して用いられると「舌足らず」「子供っぽい」表現になる事実は、倭語の形容詞が丁寧体過去形ではまだ充分に用言性を獲得できていない証左である。

「畑　*patəh」「徴　pat-」「串　*kuts」「苧　*musi」「鶴　*tyrym」「媿　*sei～*sen」
「身　mum」「葵　*apuk～*apup」「束　*tapar」「稗、稲　*piɛ～*piə」「為　hjə」

倭語から韓語への借用
「木、株　*kər」「島　*sima」「瓜　*uri」「梁、門　*tor～*tur」「雲、晦、暮　*kur-」
「蟹　*kane」

放浪語等
「熊　*Kwəm」「鯨 *kudadi」「口、顎　*akyr」

不明
「沼　*nun」「賺　*suk-」「朝　ats-」「釜　*kama」「和、柔、親　*nik-」「子 *kə～*ko」
「日　*ka～*ko～*həi」

8 世紀倭語と 15 世紀韓語の主な母音の対応を「倭：韓」で示せば次の如くである。

「u：o」
　「串」「瓜」「熊」「鯨」「沼」「苧」「身」「賺」「津」「葵」
「u：u」
　「雲、晦、暮」「鶴」
「o：ʌ」
　「日」「子」
「o：o」
　「梁、門」

ハングル転字
ㄱ k、 ㄴ n、 ㄷ t、 ㄹ r、 ㅁ m、 ㅱ w、 ㅂ p、 ㅸ v、 ㅅ s、 ㅿ z、 ㅇ ɦ、 ㆆ q、 ㆁ ŋ、 ㅈ c、 ㅊ ch、 ㅋ kh、 ㅌ th、 ㅍ ph、 ㅎ h、 ㅏ a、 ㅑ ia、 ㅓ ə、 ㅕ iə、 ㅛ io、 ㅜ u、 ㅠ iu、 ㅡ ɨ、 ㅣ i、 ㆍ ʌ、 ㅐ ai、 ㅘ oa、 ㅝ uə、

声調
L 平声、H 去声、R 上声

倭語アクセント
　L 低、H 高、R 上昇、F 下降

参考文献

秋永一枝他（1997）『日本語アクセント史総合資料索引篇』平文社

朝岡康二（1993）『鍋・釜』法政大学出版局

白一平、沙加尔著，来国龙、郑伟、王弘治译（2020）≪上古汉语新构拟≫上海教育出版公司（原著：Baxter-Sagar（2014）*Old Chinese: A New Construction*, Oxford University Press）

Baxter-Sagar（2014）https://ocbaxtersagart.lsait.lsa.umich.edu/BaxterSagartOCbyMandarinMC2014,最終閲覧日：2021 年 1 月 23 日

Beckwith, C.（2004）*Koguryŏ: The Language of Japan's Continental Relatives: An introduction to the Historical-Comparative Study of the Japanese- Koguryŏic Languages,with a Preliminary Description of Archaic Northeastern Middle Chinese*.Leiden: Brill.

曽晓渝（2004）≪汉语水语关系论≫商务印书馆

郭錫良編著（2010）　≪増訂本漢字古音手冊≫ 商務印書館

遠藤光暁（2022）「著書紹介　遠藤光暁(編)　Linguistic Atlas of Asia」『Yaponesia』第 3 巻冬号、2022 年 3 月：25－26

福井玲（2013）『韓国語音韻史の探求』三省堂

福井玲（2020）「借用語を中心とした古代の日韓の音韻対応について」長田俊樹編（2020:9-31）

服部四郎著・上野善道補注（2018）『日本祖語の再建』岩波書店

林由華・衣畑智秀・木部暢子編（2021）『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』開拓社

平子達也（2021）「［日本祖語について］と『日本祖語の再建』」林由華他（2021：52－104）

五十嵐陽介「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」林由華他（2020:17-51）

伊藤智ゆき（2007）『朝鮮漢字音研究』汲古書院

伊藤英人（2019a）「『高句麗地名』中の倭語と韓語」『専修人文論集』105 号，365-421

伊藤英人（2019b）「書評　福井玲著『韓国語音韻史の探求』」『歴史言語学』第 8 号 41－46, 日本歴史言語学会

伊藤英人（2020）「古代朝鮮半島諸言語に関する河野六郎説の整理と濊倭同系の可能性」長田俊樹編（2020:83-125）

伊藤英人（2021a）「濊倭同系論」古代文字資料館『KOTONOHA』第 224 号，https://kodaimoji.her.jp/pdf15/yitou224.pdf

伊藤英人（2021b）「朝鮮半島における言語接触と大陸倭語」日本言語学会第 165 回大会 W3-1，https://www.ls-japan.org/modules/documents/LSJpapers/meeting/163/handouts/ws3/W-3-1_163.pdf

上代語辞典編修委員会（1967）『時代別国語大辞典 上代編』三省堂〈上代〉

金田章宏（2021）「八丈方言の古層」林由香他（2021:259-284）
風間伸次郎（2021）「八丈型基層語と日本語の重層性」https://www.ls-japan.org/modules/documents/LSJpapers/meeting/163/handouts/ws3/W-3-2_163.pdf　最終閲覧日 2023.6.13
金文京（2011）「言語資源としての漢字・漢文」『文学』12－3:39-51 岩波書店
河野六郎（1945/1979I）「朝鮮方言学試攷：「鋏」語考」京城帝国大学文学会論纂第 11 輯 東都書籍
河野六郎（1957/1980Ⅲ）「古事記における漢字使用」河野六郎（1980Ⅲ）
河野六郎（1959/1979）「日本語と朝鮮語の二三の類似」八学連合会編『人文科学の諸問題：共同研究　稲』
河野六郎（1964-1967/1979Ⅱ）「朝鮮漢字音の研究」『朝鮮学報』31-44
河野六郎（1979）『河野六郎著作集I・II』平凡社
河野六郎（1980）　『河野六郎著作集Ⅲ』平凡社
河野六郎（1987）「百済語の二重言語性」中吉先生の喜寿を記念する会編（1993）所収
Lee, Ki-Moon＆Ramsey, Robert（2011）*A History of the Korean Langua*ge, Cambridge University Press
中吉先生の喜寿を記念する会編（1993）『朝鮮の古文化論讃：中吉先生喜寿記念論文集』国書刊行会
西田正規（2007）『人類史の中の定住革命』講談社学術文庫
日本中国語学会編（2022）『中国語学辞典』岩波書店
大野晋他（1974）『岩波古語辞典』岩波書店
長田俊樹（2020）「まえがき」長田俊樹編（2020）1－6
長田俊樹編（2020）『日本語「起源」論の歴史と展望：日本語の起源はどのように論じられてきたか』三省堂
長田夏樹先生追悼集刊行委員会（2011）『長田夏樹先生追悼集刊行委員会』好文出版、「東雅臆度抄」『長田夏樹論述集（下）』第 15 章 （原載：『水門－言葉と歴史』第 2 号～第 4 号，1963 年 9 月～1964 年 6 月）書評：伊藤英人 http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf10/touga-ito.pdf　最終閲覧日：2023. 3.13.
Pellard, Thomas（2013） Rykyuan Perspectives on the proto-Japonic Vowel System,Published in Bjarke Frellesvig & Peter Sells. 2013. Japanese/Korean Linguistics 20. Stanford: CSLI Publications, p. 81–96. https://hal.science/hal-01289288/file/Pellard_2013_Ryukyuan_perspectives_on_the_proto-Japonic_vowel_system.pdf　最終閲覧日：2023 年 3 月 14 日
ペラール・トマ「日琉諸語の系統分類と分岐について」林由華他（2021：2－16）
Poppe,N.（1960）*Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen*. Wiesbaden:Otto Harrassowitz.
Robbeets（2020）Supplementary Information Chapter 36 Basic Vocabulary. https://pure.mpg.de

/rest/items/item_3230618_8/component/file_3230620/content 最終閲覧日：2023.6.27.
Robbeets, Martine, Savelyev, Alexander（2020） *The Oxford Guide to the Transeurasian Languages,* Oxford Guides to the World's Languages
阪倉篤義（2011）『増補 日本語の語源』平凡社
瀬間正之（2020）『上代のことばと文字』花鳥社
Starostin, et al. （2010） An Etymological Dictionary of Altaic Languages https://www.bulgari-istoria-2010.com/ Rechnici/etymological_dictionary_of_altaic_languages.pdf, 最終閲覧日：2012 年 1 月 23 日
谷川健一（2010）『列島縦断地名逍遙』冨山房インターナショナル
都守熙（2005a）『百濟語研究』J&C
都守熙（2005b）『百濟語語彙研究』J＆C
Tranter, Nicholas （2011）*The Languages of Japan and Korea.* Routledge
辻星児（1997）『朝鮮語史における「捷解新語」』岡山大学文学部研究叢書 16 岡山大学文学部
Whitman,John（2011） The relationship between Japanese and Korean, Tranter（2011:24-38）
梁柱東（1942）『朝鮮古歌研究』博文書館
伊藤英人（2008）“淺談有關‘借字表記法’研究的幾箇問題”遠藤光曉、嚴翼相編 ≪韓漢語言研究≫學古房 455－469
https://www.etymonline.com/（最終閲覧日：2023 年 3 月 23 日）

謝辞

常に有益な資料とご助言を下さる長田俊樹先生、研究会報告以前にご教示を頂いた杉山豊氏、河崎啓剛氏、研究会でコメント下さった諸兄姉、本稿の元になった日本語エッセイをお読み下さり、いっしょに韓訳（未刊）して下さった槿桑ゼミの諸姉に心より感謝申し上げます。そして、日韓言語学の著作で筆者を含む読者を魅せ、朝鮮に関する言説が政治一色だった時代に、古墨の香かそけく松葉の香ゆかしき朝鮮古文明についての珠玉の文章を遺された故長田夏樹先生にこの覆瓿を捧げます。